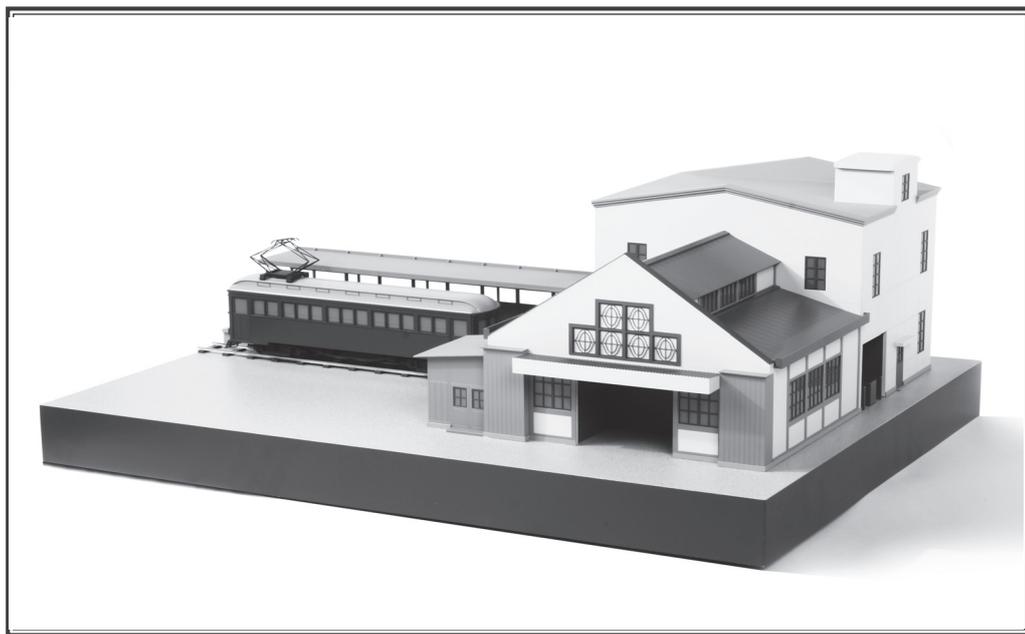


あるむぜお118

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 118

2016年12月20日



玉南鉄道府中駅の模型

目次

- 1-2 祝！府中駅誕生 100 年
 - ③玉南鉄道府中駅はどこにあった？
- 3 最近の発掘調査
高倉古墳群で出土した埴輪
- 4-5 ノート 宇宙から星を測る
- 6 たまがわ野鳥コレクション
③冬鳥の主演ーカモ
- 7 展示会案内
特別展 多摩川・冬鳥の陣
- 8 連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活
⑦子権現（間島神社）の開帳

祝！府中駅誕生 100 年

京王電車が新宿と府中の間に開通したのは、1916年（大正5）のことです。その時誕生した府中駅は、今年100歳になりました。この大きな節目に、京王電車の開通を軸に、府中の近代を振り返ってみたいと思います。

③玉南鉄道府中駅はどこにあった？

写真は、京王電鉄株式会社が所蔵している設計図をもとに、推測を加えて作製した、玉南鉄道府中駅の模型です。1925年（大正14）に完成したこの駅は、写真などが残っておらず、模型作製に用いた設計図が、その姿を今に伝える唯一の史料です。駅舎の外観とプラットフォームを再現してみると、モダンで立派な造りだったことがわかります。

祝！府中駅誕生 100 年

③玉南鉄道府中駅はどこにあった？

京王電車の当初の計画は、その名が示すとおり、東京と八王子を鉄道で結ぶ予定でした。しかし、資金不足などの問題から府中以西の線路敷設工事に着手できず、免許が取り消されてしまいました。この取消し区間に鉄道を敷くべく、地元の人々と京王電気軌道が協力して1925年（大正14）に開通したのが、玉南鉄道です。

府中と東八王子（現 京王八王子）を結ぶこの鉄道により、京王電車の敷設計画は達成されたかに思えるのですが、ひとつ大きな問題がありました。玉南鉄道の軌間（レール間の幅）は京王電車より1フィート（約30.5cm）狭く、車両の相互乗入れができなかったのです。

これは、補助金の取得を目論んだ玉南鉄道が地方鉄道法で免許を取得したため、軌道条例に基づく京王電車とは異なる軌間とならざるを得なかったのです。それにもかかわらず、近距離を並行する中央本線との利益相反を懸念されて、玉南鉄道の補助金申請は却下されてしまいました。

補助金という目的が潰れたうえは、別会社であることにメリットはありません。1926年、玉南鉄道は京王電気軌道と合併し、軌間の統一工事などを経て、1928年（昭和3）、ようやく新宿・東八王子間の直通運転にたどりつきました。

さて、ここからが本題です。開通から直通運転までの約3年間、京王電車と玉南鉄道の2つの府中駅があったのですが、それらが置かれた場所について、今回は考えてみたいと思います。

府中には、大國魂神社の神域であるケヤキ並木を線路が横切ることを憚って、ケヤキ並木を挟んで東側に京王電車の駅、西側に玉南鉄道の駅があったという話があります。府中における人の乗換え、貨物の積換えを考えると、2つの駅を離して設置することは合理的ではないような気がしますが、実際はどうだったのでしょうか。

今夏に開催した特別展「京王電車がとあったころ～府中駅誕生100年記念～」に伴う調査で、1923年に締結された京王電気軌道と玉南鉄道の土地の貸借契約書を発見しました。ここには、玉南鉄道が停車場用地として「新宿北 9065

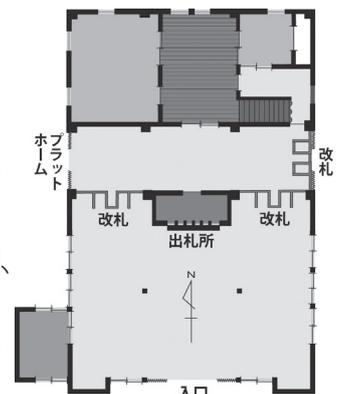


1941年（昭和16）の府中町の地図（部分）

～9073番」を京王電気軌道から借用することが記されていました。停車場とは駅のことですので、このエリアに玉南鉄道府中駅が設置されたと考えられます。これを上の1941年の地図で確認してみると、一部消えている地番はあるものの、ケヤキ並木の東側にあることがわかります。ここから、玉南鉄道府中駅はケヤキ並木の西側ではなく東側にあり、開通当初から線路はケヤキ並木を横切っていたと判断できます。

それでは、京王電車と玉南鉄道の府中駅はどのように配置されていたのでしょうか？

まずは、表紙の模型写真を見てください。駅舎とプラットホームの位置関係、および電車の進行方向から、玉南鉄道の駅舎入口が南向きだったことがわかります。それを踏まえて、模型のもととなった設計図から作成した1階部分の図（下図）を見ると、改札が入口を入れて正面左右と、駅舎の東側にあるのが確認できます。なぜ2か所あるのか不思議でしたが、東側の改札がまっすぐプラットホームに繋がっていることから、これを京王電車との乗換え用だと考えると合点がいきます。つまり、京王電車の府中駅は、玉南鉄道府中駅の東側に建てていたと推測できるのです。京王電車の駅舎の構造などは定かではありませんが、この時期、2つの府中駅が近接して建てていたのは、間違いないでしょう。



（花木知子）玉南鉄道府中駅の1階平面図

高倉古墳群で出土した埴輪

美好町三丁目 府中市ふるさと文化財課 西野 善勝



このたび、今年の春に出土した埴輪の復元作業が完了しました。全体が復元できた貴重な埴輪を紹介したいと思います。

復元した埴輪は、円墳の周溝内で発見されました。周溝の幅は4～5m、墳丘の直径は10m以上と推定できます。調査地点は、市史跡高倉塚古墳を含む約30基の円墳で構成される高倉古墳群の中にあります。高倉古墳群で、埴輪を伴う古墳が発見されたのは今回が初めてです。

埴輪とは、古墳の墳丘の上部や周囲に並べられた土製品です。人や動物、家などの形をした形象埴輪と、筒状の円筒埴輪に大きく分けられます。円筒埴輪の上部に朝顔の花のように開いた部分が付いているものを朝顔形埴輪と呼んでいます。

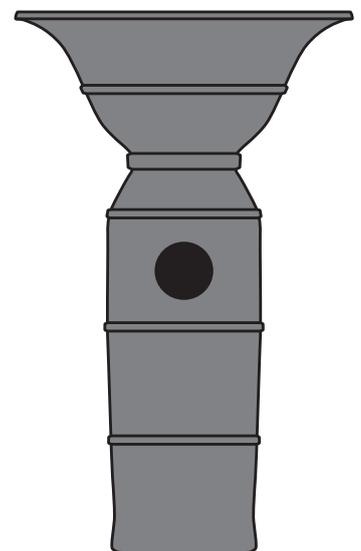
出土した約230点の埴輪片を接合したところ、円筒埴輪3個と朝顔形埴輪1個が復元できました。最大のもので高さ約40cm、中央付近の直径が約17cmです。円筒埴輪には2条の凸帯と透かし穴があげられています。素焼きのため赤褐色をしていて、表面を整えるために付いたハケメと呼ばれる痕跡が見られます。朝顔形埴輪は、上部と2段目が欠損していましたが、高さを推定して復元しました。

市内での埴輪を伴う古墳は、御獄塚古墳群の1基に次ぐ発見です。このときには4個の円筒埴輪が復元できました。

これらの埴輪の製作年代は6世紀代と考えられます。6世紀から7世紀は、古墳時代の後期・終末期にあたり、府中市内では白糸台古墳群・高倉古墳群・御獄塚古墳群の三つの群集墳と上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳が築造されました。

今回出土した埴輪には、埼玉県東部の埴輪窯で生産されたものに類似する点があるので、埴輪生産地からの完成品の供給や埴輪製作技術者の派遣が推測できます。いずれにしても遠隔地との交流を物語る遺物であることは確かです。

埴輪を伴う古墳は、市内では2基しか発見されていませんので、特別な存在といえます。埴輪が並んだ古墳では盛大な儀式が執り行われたことでしょう。そこには遠方からの参列者もいたのではないのでしょうか。



朝顔形埴輪想像図



アンドロメダ銀河 筆者撮影

▼はじめに

写真は、私たちの住む銀河系のおとなりのアンドロメダ銀河です。銀河系もアンドロメダ銀河と同じような渦巻き銀河の一種であることが分かっています。銀河は、太陽と同じような星、恒星が小さいもので数百万個、大きなものになると数千億個もあり、星の大集団をなしています。

銀河系の星々の位置や運動は、地上の望遠鏡で調べられてきました。その結果から出された星の位置などを記録したカタログはいくつかあり、代表的なものとしてスミソニアン天文台のSAO星表、ハーバード大学天文台のHD星表などがあります。どれも天文学の観測や研究などに利用されてきましたが、銀河系の内部を詳細に調べるには、数も精度も足りません。

▼宇宙から星の位置や距離を調べる

20世紀も終わりになると、大気の影響を受けない宇宙に、望遠鏡を打ち上げる時代になりました。1989年にヒッパルコスと名付けられた望遠

鏡搭載の衛星が打ち上げられ、その観測から地上の望遠鏡での観測とは比較にならないほど精度の高い、約12万個の星を記録した星表がつけられました。しかし、精度は上がったものの、観測した星の数は銀河系にあるおよそ百億個の恒星の、1パーセントにも満たないものでした。その後継機として、ヨーロッパ宇宙機構（ESA）が、2013年12月19日、ロシアのソユーズ2で宇宙望遠鏡ガイアを打ち上げました。これにより、今



宇宙望遠鏡ガイア

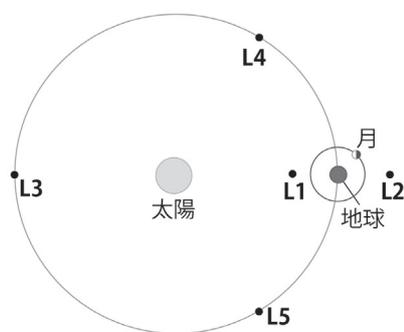
©2015 All rights by ESA, European Space Agency

まさに 10 億個以上の星たちの詳しい位置や運動の観測が、高い精度で進められています。

2016 年のプラネタリウム秋番組「ビリオンサン 星空 3 次元マップをつくれ」では、その宇宙望遠鏡ガイアを紹介していますが、ここでは、このガイアをさらに詳しく、また番組では取り上げられていない、日本が打上げを予定している、赤外線位置天文観測衛星ジャスミンについて紹介します。

▼ 宇宙望遠鏡ガイア

ガイアは、太陽と地球の系で安定した 5 つのラグランジュ点のひとつ、地球から見て太陽の反対側にある L2 に投入されました。L2 ポイントを周回することで、地球の影に入ることなく、



ラグランジュ点

熱的にも安定した状態で、さまざまな天体を観測しています。

天体を捕える望遠鏡は、2 セットの反射望遠鏡です。宇宙船の限ら

れた空間の中で効率よく観測するために、光を集める鏡の形は、普通の望遠鏡のように丸くなく、その一部分を切り取った長方形です。それらの望遠鏡では、5 等から 20 等星までの星を何回か撮影し、個々の星の視差から、星までの距離を求めます。加えて、星の固有運動を測定し、スペクトルからドップラー効果を測り、視線方向の速度を求め、銀河系の非常に高精度の 3 次元地図を描く予定です。ちなみにドップラー効果とは、1842 年にオーストリアの物理学者ドップラーによって見いだされたもので、音源が移動した場合、近づく時に音が高くなり、遠ざかる時には低くなることです。近づく救急車と遠ざかる救急車では音が変わるのはドップラー効果によるものです。これは、音の場合ですが、光の場合でも同じ現象が起こります。また、天体のスペクトルから温度、組成などを調べます。

一つの天体を 70 回、10 億個の星を 5 年間で観測するとして、単純に計算しても 1 日に 4,000 万個もの天体を観測することになります。実際に

は、もっと多くの星を観測でき、データの総量は CD-ROM150 万枚分になると言われています。この大規模な観測結果は、銀河系の起源、構造、進化に関する問題に取り組む際の基礎データとなります。同時に、太陽系の天体や多くの恒星の周りを回る、太陽系外惑星などが測定されることとなります。

▼ 日本の挑戦

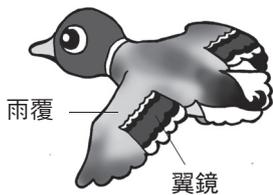
日本では、JASMIN (ジャスミン) 検討室が国立天文台内に設置され、同様の計画が進められています。特徴は、搭載する望遠鏡を超小型 (ナノジャスミン) から段階を踏んで大きくしていくこと。ナノジャスミンで全天をカバーし、その後大きくなったジャスミンでは、銀河の中心方向を詳しく調べます。このままではガイアと同じことをするだけですが、ガイアが人間の目で見える可視光を観測するのに対して、ジャスミンは、少し波長の長い赤外線を観測します。銀河系のディスクにはガスがたくさんあります。このガスは、星からの可視光を吸収してしまうため、遠くの星の位置を精度良く観測することを難しくします。一方、赤外線は、ガスからの吸収を受けにくいので、ディスク面に沿った遠い方向や銀河の中心付近の星の位置と動きを正確に決めるのに適し、遠方の天体を精密に観測することができます。

▼ ナノジャスミン、そして小型ジャスミンへ

日本が打上げを予定しているナノジャスミンは、日本で初めての宇宙からの位置天文の観測を行う目的の超小型衛星です。一辺 50 cm の立方体で重量 35 kg のこの衛星は、ガイアの最長 4.3m、打上げ時重量 2,030kg に比べると、とても小さい筐体です。そこには、ガリレオが使った望遠鏡と大差ない、口径 5 cm の望遠鏡が搭載されます。ガイアは口径が大きいため、明るい星の観測が不得手ですが、ジャスミンは明るい星の観測が可能なので、ガイアのデータを補完するものとしてヨーロッパ宇宙機構も期待しています。

これからガイアによって新しい銀河系のさまざまな星のデータが届き、解析が進むと新たな銀河系の姿が浮かび上がってくるでしょう。それに、ジャスミンのデータが加わり、さらに詳しく描かれた銀河系の姿を早く見たいものです。

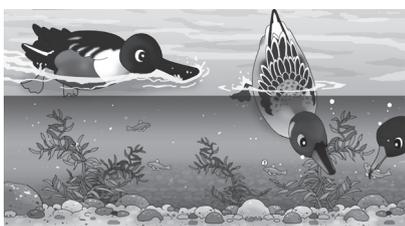
多摩川野鳥セクション



③一冬鳥の主役—カモ

ずんぐり体型で、クチバシは横に平たく、足の指には水かきアリ。尾を振りながら歩く姿はよちよち行進・・・とくれば、水辺の人気者・カモです。カモは、中型から大型の水鳥で、湖沼や沿岸部を生活場所としています。日本では、99%が冬場にしか観察できない季節限定の渡り鳥です。カモの繁殖地は、シベリア東部の寒帯から亜寒帯にかけての地域で、寒くなると雪と氷に閉ざされ、餌を採るのもままなりません。そこで彼らは長距離を飛行して温帯・亜熱帯地域に渡って来ると言うわけです。120種を数えるカモの仲間内、日本を訪れるのは30数種で、上野の不忍池や新潟の瓢湖など、有名な飛来地リストの中には多摩川も加わっています。99%渡りをするカモの内、唯一日本に一年中留まって、繁殖している種類はカルガモだけです。

それでは多摩川で観察できるカモをじっくり見ていきましょう。まずは、彼らの餌の採り方に注目してください。クチバシを水面と平行に進ませながら泳ぐ姿を目にしますが、実はこれが採餌のスタイルです。平たく横に広がる特徴的なクチバシで、水面に浮いた植物の種や微生物をすくい採っているのです。また、体半分を水中に潜らせながら逆立ちの格好で、水底の水草などを食べるのにも適しており、いわゆるシャベルの役割を担っています。主に淡水域にいる大方のカモのクチバシは一樣ですが、ハシビロガモのように、超特大で靴べらのような形をしたものもあります。海水域に多いカモも水中に潜って魚類や貝類、海藻などを食べますが、特にアイサ類のように、クチバシの先が鍵状で、採った魚が離れにくい形となっているカ



餌を採るのに適したクチバシ

モもいます。採餌法が異なることで、微妙な違いが淡水域と海水域のカモで見られます。水面上、もしくは上半身を潜らせて餌を採る淡水ガモは胴のほぼ中心に足があります。陸に上がって歩くことも多いので、バランスを取るのにも有効です。水に浮く姿も尾が高く上がっています。対して海ガモの足は胴のやや後方に付き、潜水採餌には適当です。尾は水面に浸かっていることが多く、陸上では体を立てています。飛び立つ時は水面を助走するので、垂直に飛び上がる淡水ガモとは異なる足の使い方なのでしょう。

次はカモの羽に注目。静止しているカモの、たんでいる羽を見ていると何やらチラッとカラフルな部分が見えます。これは翼鏡と呼ばれ、カモ類の次列風切羽に現れる特有の色です。この色は種によって様々なので、翼鏡と雨覆の色の組合せで、遠くで飛んでいるカモが識別できることもあります。翼鏡は色素ではなく、微細な構造による反射や干渉で現れる色なので、見る角度によって違う色に見えるのです。翼鏡のある次列風切羽は旅客機のフラップ部分に相当し、飛行中も比較的固定されています。群れを作って渡りをするカモは、前を飛ぶカモの翼鏡を目印にしているのではないかと考えられています。

もう一つ羽のミステリーがあります。渡り先の土地で見るカモの雄は、雌同様の地味な羽色をしており、図鑑に載っているような雌雄の識別が難しいことがあります。これは、繁殖後に雌雄共に羽をリニューアルするのですが、その際に雄の羽がエクリプス羽と言う地味色に変わった状態で渡って来るからです。越冬地ではふたたび綺麗な雄の羽色に戻り、身だしなみを整えた雄は、雌に求愛してつがいを形成すると、繁殖の地へと戻って行くのです。

多摩川の中流域は、渡り鳥・・・特にカモには欠かせない越冬地です。コガモやヒドリガモを頭に10種類前後が訪れます。但し、1997年以降、それぞれの個体数で、減少傾向が報告され現在に至っています。豪雨や台風による環境変化や、護岸や鉄橋補修などの河川工事が要因と考えられるものの、近年、他方面から進出している多様な野鳥が多摩川を賑わしていることにより、もしかしたら満員電車を避けるような意識が働いているのかも知れませんね。(中村武史)

あしもとネイチャーワールド

多摩川・冬鳥の陣

1/28 (土) ~ 3/12 (日)

会場：本館 1 階特別展示室

観覧無料



日本に生息する野生鳥類の4分の3に相当する約4,000種は、太平洋・北米大陸・ロシア・東南アジア諸国などを渡ると言われます。これらの鳥は、繁殖地と越冬地を正確に移動する行動を毎年繰り返し、「渡り鳥」と呼ばれます。日本で言うところの「渡り鳥」は、南方で冬を越し、春から夏に渡来して産卵・育雛を行う「夏鳥」、北方で繁殖し、餌の乏しくなる秋から冬に渡来して越冬する「冬鳥」に分けられます。

また、北から南へ長距離移動するシギやチドリの間は、シベリアから東南アジアに向かう途中に日本を中継地として利用します。さしずめ道の駅でちょっと一服と言った感じですが、これらを「旅鳥」と呼びます。他には、正式な「渡り鳥」ではないものの、日本国内の山地と平地を季節で行ったり来たりする「漂鳥」、同一地域からは動きませんが、近距離移動を行う「留鳥」がいます。

これから日本に渡って来るのは、カモ類やツグミのように越冬目的で北方から訪れる「冬鳥」たちがメインとなります。

さて、渡り鳥を迎える常宿の多摩川ですが、野鳥にとっては変化に富んだ生活空間があります。流れの速い瀬、淀んだ淵、中洲、ワンド、水際、高水敷（河原）の草原、堤防など、選択肢は様々です。これに人工の護岸や堰なども多く設けられ、それぞれの生態に適した場所で年間を通して過ごす種類も豊富です。

毎年飛来して冬を越す渡り鳥や、高い山などが

ら平地に下りてくる漂鳥が加わると、一気に鳥相が豊かになるのです。府中の南縁を流れる多摩川において、訪れる「冬鳥」の主役は、何と言ってもカモの仲間でしょう。カモ類の数が特に目立つ理由は、餌の乏しい冬季には集団で行動するため、群れを見つけやすいからです。集団生活は、天敵が接近した時もすぐに感知できる利点があります。水面を賑わすカモに加えて、水際では旅鳥のシギやチドリも観察できます。

ここに新たなグループが混じって来ます。近年、里山環境の減少で住処を追われた山野の鳥が都市に進出していますが、例にもれず府中の市街地でも多種が観察できます。但し、豊かな自然を有する府中では、すぐ近くに多摩川という絶好の環境が存在しているので、里山→都市→多摩川の三角飛びでやって来る種も目立っているのです。彼らにとって見れば、新天地で暮らすエリアの拡大と言ったところでしょう。府中市の鳥・ヒバリでさえ、畑地などが少なくなった市街地から多摩川に居を移している現状であり、主に河口域を餌場としていたカワウが、今や中流域まで大挙して上っている様子も見逃せません。

多摩川は、この冬に集まって来る野鳥すべてを呑み込めるのでしょうか？ 今回の展示では、カモを主体とする冬鳥と、里山から都市に流れてきた鳥を併せて紹介します。府中を流れる多摩川は、都市生態系の一環であることを、野鳥を通じて理解してもらえたらと思います。（中村武史）

連載『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

『県居井蛙録』は、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残されていた、享和2年(1802)から天保7年(1836)にいたる日々の記録です。4代当主重高と5代当主重英によって著されたこの史料には、当時の庶民の生活に関わるさまざまな出来事が記されています。本コーナーでは、毎回テーマを決めてその内容を紹介します。

『県居井蛙録』を眺めていると、しばしば「開帳」という文字が現れます。普段は見せることのない仏像や神像を、特定の期間だけ参詣者に拝観させることです。その中でも、寺社が本尊や宝物を出張させて開帳することを「出開帳」と呼びます。江戸時代にはこの出開帳が各地で行われていました。内藤家の人々も、しばしば出開帳目当ての寺社参詣をしていました。特に江戸で行われた出開帳にはたびたび出かけています。いくつか例をあげてみると、善光寺(長野県)、阿波大杉明神(茨城県)、江の島弁財天(神奈川県)、道了尊(神奈川県)、成田山不動尊(千葉県)など多彩です。家で多くの神仏をまつている内藤家にとっては、出開帳は様々な神仏を拝観できるとともに、行楽として江戸の中心部に行く機会でもあったのではないのでしょうか。

一方、地元における開帳の記事もありました。文政13年(1830)3月に、内藤家のある小野宮に隣接する間島(現 住吉町)で行われた、「子権現」の開帳については特に詳細です。子権現とは、現在の埼玉県飯能市にある天台宗寺院・天龍寺、または天龍寺を創建した子ノ聖のことで、足の悪い人にとって靈験あらたかといわれています。同様の信仰を持つ分身の神社やお堂が、関東地方を中心に多くあり、間島の子権現はそのひとつです。

⑦子権現(間島神社)の開帳

間島での開帳については、3月10日と12日から15日にかけて、「開帳立会」と記されているので、内藤重喬もしくは子の重英は、この開帳に関わっていたと思われます。期間中は多くの人が参詣し、寄付金もたくさん集まったようです。最終日の15日には、餅投げなどのイベントも行われ、その後子権現は遷宮されたといえます。遷宮とは、神仏を遷して安置することです。つまりこの開帳は、新しい建物に子権現を遷す際の記念行事だったと考えられます。翌16日には、この開帳の際に得た寄付金や、供物を売った収入が12両あったため、経費を引いた2両を今後の屋根修復料とすることも決まりました。このように、開帳が寺社の運営に大きな意味を持っていたことがわかります。



現在の間島神社社殿

間島の子権現は、伝承では地元の森田家が、この開帳以前に個人でまつりはじめたとされています。この開帳が行われた際も、森田家によって管理されていました。明治に行われた神仏分離政策に伴い、地名にちなんで間島神社と改称され、間島の鎮守として親しまれていったようです。しかし現在でも俗称として「ネノカミさま」「権現さま」と呼ばれ、最近まで足がよくなるおまじないとして草鞋などが奉納されていました。

これまで知られてきた伝承に加え、江戸時代後期における開帳、遷宮の詳細が、『県居井蛙録』によって明らかになりました。もちろんこれは子権現が地域の鎮守として定着する以前の出来事です。しかし、前身とはいえ地域の鎮守の歴史がここまで具体的に探れることは少なく、とても貴重な記録です。(佐藤智敬)